

第10分科会「里山と森林・林業」

野外観察・シンポジウム「木質バイオマスを現代の暮らしに活かす」

共催：東金市

日時：2006年5月14日（日）10:30～16:00

場所：（午前）東金市東金文化会館 第2会議室
（午後）付近のスギ林

参加者：午前36名，午後58名



趣旨

森林・林業分科会では、過去2回のシンポジウムを通じて、森林資源を暮らしに生かす循環型社会の構築を考え続けてきた。森林の持つ木材生産や空気の浄化、水源の涵養などの多面的な機能を、私たちの暮らしを支えている空気のような存在としてその重要性を確認し、森林を保全活用するための様々な提案をしてきた。今回は森林資源のカスケード利用を再確認しながら、その最も川下である木質バイオマスのエネルギー利用について、具体的に考える機会とする。燃料革命以来忘れられてきた木質バイオマスが再び注目されている現在、地域産業としての林業振興は、地球温暖化の問題などグローバルで、かつ緊急な課題に対する実践的な対応でもある。



報告

- ・基調報告 稗田忠弘（さんむフォレスト）
- ・事例報告 野源治（林業家）
- ・事例報告 野嶋正宏製材業者（山武グリーン会）
- ・事例報告 本間一夫（さんむフォレスト建築家）
- ・事例報告 石田光男（薪ストーブユーザー）

コーディネーター 稗田忠弘（さんむフォレスト）

内容

現在の林地残材や製材所の背板などはゴミとして扱われているが、燃料革命以前の暮らしの中では貴重なエネルギー源として利用されていた。地球温暖化の問題や、持続可能な社会のあり方が緊急なテーマになっている現在、森林資源を木質バイオマスというエネルギー源として見直し、現代の暮らしに生かす工夫を探る。山武杉の産地である東金、山武地域を対象に、住まいづくりからエネルギー源としての利用まで、各職域からのパネラーの報告を受け、木を使い切る循環型社会のあり方考える。

午前の森林ウォッチングで山武林業のおかれている状況の一端を見て、一見緑豊かに見える森林が間伐の不足や病害の問題を抱えていることについて、行政の担当者やパネラーから説明を受けた。午後のパネルディスカッションでは、木質バイオマスを上手に使っている事例の紹介と、パネラーのそれぞれの立場から現状について報告があった。

・林業家・猪野源治：

林業から収入を得ることが出来ない状況で、山に対する意欲が薄れがち。これからも林業に携わってゆきたいが、難しいのが実態。環境保全の面から山のことが話題になることが多くなったが、林業家としては寂しい気持ちだ。

・製材業・野島正宏

製材業者はどんな仕事をしているのか説明。山で丸太を買い、製品にして売るまでの経費を積み上げると、ホームセンターで売っている材木の単価では売ることが出来ない。昔は杉の皮も背板も捨てるどころ無く売れたが、現在はお金を払って処分している。

・さんむフォレスト・本間一夫

地元の木材と地元の技能者による住まいづくりの実践。建築を地域循環の視点で考えると、地域の自然、産業、経済の循環を作り出すことが出来る。更に、建築や家具に木材を利用すると端材や残材が発生するが、暖房設備として薪ストーブをつけることで、それらの木を使い切ることが出来る。

・薪ストーブユーザー・石田光男

自宅をリフォームする機会に設計者のすすめで薪ストーブを使い始めた。慣れるとどんな木でも燃やせるようになり、楽しめる。家族が集う場所が出来たこと、家族で山に薪集めに行くことなど、ストーブのある生活を楽しんでいる。



結 論

木材をエネルギー源として利用するという今回のテーマも、必然的に森林資源のカスケード利用に結びつく。いわゆる林業の川上から川下までの流れ方の問題であり、木質バイオマスのエネルギー利用は、最も川下に当る。地元材を活用すればするほど、端材や残材は増えてゆくのであり、シンポジウムの一貫した目的である森林の持つ多面的機能の保全と活用も、このような川下の問題を抜きには語れない。

木質バイオマスをエネルギー利用するという川下の視点から、川を遡るように、木材生産や住まいづくりを見ると、自然、産業、経済の地域循環の必要性が再確認できる。シンポジウムの参加者に、実は資源に恵まれた地域に暮らしているということ、その資源を上手に取り込んだ、住まいや暮らし方の可能性があることを感じてもらえたならば、シンポジウムの目的を果たしたものと思う。

課 題

森林資源の地域循環の必要性は理念としては受け入れられている。しかし、産業と経済の地域循環を生み出すには量的な拡大が必要であり、地元業界の努力とともに、行政が地域産業としての認識を深め、関連業界の連絡調整などに努力する必要がある。